



私の後悔

弁護士になってから、ずっと「町弁」として過ごしてきた。時々、大型の消費者事件、薬害事件、大型の労働事件をやった。刑事案件で控訴審で逆転無罪を取ったことも1度だけある（その時は、もう弁護士辞めてもいいや、と思った）。

しかし、30年を超える弁護士生活の中で、うまくいった事件の記憶はほとんど蘇らない。蘇るのは失敗した事件、弁護過誤の数々である。そのような失敗体験の中でも何度も何度も繰り返し記憶に現れる事件がある。

弁護士になって半年くらいたつ頃だった。私の事務所では、新人弁護士は最初の半年は先輩と一緒に相談に乗り、事件を担当する決まりだった。しかし、それ以降は、一人で相談に乗り、事件を担当することになっていた。

その日、私が一人で相談室に入ると小さいおばあちゃんが一人ポンと座っていた。彼女は、借家住まいでの家主から立ち退きを迫られていた。

おばあちゃんに身寄りがいるか聞くと、「野原の中の一本杉よ」と言って悪戯っぽく笑った。おばあちゃんは手塚治虫の古い漫画の

初版本を数冊持っていた。それが彼女の唯一の自慢だった。年金暮らしで、財産もほとんどなかった。

家賃は滞りなく払っており、今回の立ち退きは老朽化が唯一の理由だった。当時はバブルが崩壊したばかりだ。しかしその余韻が残っており、再開発のための立ち退きであることは見え見えの事案だった。

今思えば、おばあちゃんのためにはどうにでも有利に処理できた案件だと思っている。しかし、その時の私は初めて事件を担当することがとても怖かった。一人で事件をうまく処理できる自信が全くなかった。そこで断ることにした。

その時私がおばあちゃんに何と言ったかは記憶にない。「もっとよく家主さんと話してみたら」などと適当なことを言って帰ってもらったのだと思う。

しかし、相談が終わって、事務所から帰っていくおばあちゃんの姿ははっきりと覚えている。がっかりしたような顔をして、文字通り肩を落として帰っていった。

その後ろ姿を見て、初めて「ああ、俺はなんということをしてしまったんだ」と思った。

今でも問題はあるが、当時の司法アクセスは格段に悪かった。そのような中でおばあちゃんはおそらくは様々な伝手を頼ってやっと辿



筆者近影

り着き、勇気を振り絞って相談に来たのだと思う。その相談者を私の未熟さが追い返してしまった。その後ろ姿に、よほど声をかけて呼び戻し、先輩と一緒に再相談しようかとも思った。しかし、声をかける勇気もなかった。

私は、経験のないこと、知識のないこと、そして何より勇気のないことはプロとして罪だと思い知った。そのことは、それ以降業務をするにあたって心においているつもりである。

しかし、それにもかかわらず、それ以降も繰り返す失敗の数々……。日暮れて道遠し。それでもとばとばと行かざるを得ない。

その相談から半年もたつただろうか。どうしても気になって彼女の家があったはずの場所を見に行つた。しかし、そこに家はなく、更地だけがあった。

NF